The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	昭和初期の女子教育とマスメディア : 関西圏の高等女学校・女子専門学校卒業生へのインタビューより
Author(s)	木村, 涼子
Citation	大阪大学教育学年報. 2021, 26, p. 63-74
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79118
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究ノート〉

昭和初期の女子教育とマスメディア
―関西圏の高等女学校・女子専門学校卒業生へのインタビューより―

木　村　涼　子

【要旨】

女性が受ける教育機会が限定されていた戦前に高い教育を受けた女性たちは、どのように社会をみつめ、いかなる人生を歩んできたのか。昭和モダニズムの1930年代からファシズム期から敗戦までの激動の時代に、活字メディアに日常的に親しんでいたことが推測される、高等女学校以上の教育を受けた高齢女性を対象に、ライフヒストリーについてのインタビュー調査をおこなった。

筆者は、これまでに戦前の大衆婦人雑誌を素材に誌面の多面的分析をおこなうことによって、婦人雑誌が読者に提示していたバーチャルな世界観を総合的に描き出すとともに、読者とメディアの関係性を論じてきた（木村 2010）。本稿では、聞き取ったライフヒストリーの中でも、女子教育および商業雑誌や書籍・映画などマスメディア・大衆文化との関わりに焦点をあてて、「語り」の整理をおこなうとともに、教育や文化への女性自身の意味付けにアプローチする。

1. はじめに

戦前は女性が受ける教育機会には多くの制限があった。一般に教育を受ける経験は、リテラシーや知識欲の向上をもたらし、メディア接触を増大させ、結果として社会の構造や変動に対する認識を広げる。昭和モダニズム1930年代からファシズム期から敗戦までの激動の時代に、比較的高い教育を受けることができた女性たちはどのように社会をみつめ、いかなる人生を送ってきたのだろうか。本研究は、戦前に高い教育を受けた女性の方々を対象としたインタビュー調査をおこない、その中でも教育経験と商業雑誌や書籍・映画などマスメディア・大衆文化との関わりに焦点をあてて「語り」の整理をおこなう。

筆者は、これまでに戦前の大衆婦人雑誌を素材に誌面の多面的分析をおこなうことによって、婦人雑誌が読者に提示していたバーチャルな世界観を総合的に描き出すとともに、読者とメディアの関係性に関する仮説的な議論を提示してきた（木村 2010）。その議論を基としながら、活字メディアに日常的に親しんでいたことが推測される、高等女学校以上の教育を受けた高齢女性を対象に、ライフステージごとのマスメディア経験とそのことへの女性自身の意味付けに迫るために、インタビュー調査という手法を用いる。

マスメディア史研究も、近代日本の女性のライフヒストリー研究もそれぞれに蓄積されているが、両者を関連付ける発想での実証的な研究は少ない。その背後には、過去のマスメディアについて本格的な読者調査が困難であることと、生育歴の過程でマスメディアが「自然な環境」として大衆化していればいるほど意識されることが少なく、結果としてひとびとが自らのライフヒストリーを語る際に、自発的には言及されがたいという事情が挙げられる。その「壁」を乗り越えるために、筆者のこれまでの研究からつくりあげた手法には、以下の３つの特徴がある。

（1）メディアについて項目的／表層的に「愛読書は？」「愛読した雑誌は？」といった尋ね方をするのではなく、調査協力者が語るライフヒストリーの流れにあくまでも沿いつつ、具体的なエピソード、ライフイベントごとに、当時の生活環境の一部としてマスメディアの記憶を呼び起こすこと。

（2）記憶の中に、当時読んだ本や雑誌、愛好した映画や歌、流行のファッションや言葉など、「何か心に残っているもの」を糸口として、当時の出来事と価値観や思い、その中に織り込まれた多様なマスメディア文化に係る「語り」を、さまざまな要素が複合されたままに聞き取ること。

（3）ある調査協力者のライフヒストリーの中で語られた事柄を、別の調査協力者のインタビューを行う際のヒントとして活用するなど、調査者を媒体に各人の「語り」を呼応させることによって、昭和初期に児童・青少年期を過ごした同世代の共通の記憶を描き出すこと。

以上３点を重視することによって得られた「語り」のデータを、調査者の視点から分解し、再構築することが肝要となる。

これらの聞き取り方に共通する工夫として、折々に適切と思われるメディアや作品の例をインタビュアーの側から提示する「介入」をおこなうということである。こちらから具体例を挙げながら意識的に質問することによってはじめて、人々の記憶の中から当時読んだ雑誌や本、愛好した映画や歌と、それらから受けた影響が浮かびあがってくる。それこそがマスメディアの影響の特殊性ではないだろうか。マスメディアと読者との関係性は、読者自身には特別な事柄として意識されにくい形で成立しているからこそ、インタビュアーが具体的な事例や仮説をもって引き出す努力をしないと、インタビュイーの意識上に上ってこないのである。

本研究全体では、教育とマスメディアが女性の意識や行動に与える影響を、短期的・表層的ではなく、女性の「人生」という枠組みで総合的に分析することを目指すが、本稿では研究ノートとして、女性たちの「生きられた経験（lived experience）」に関する貴重な「語り」データから新しい成果を生み出すための、基礎作業をおこなう。

2. 調査方法と調査対象

本研究では関西圏において、女子中等教育機関である高等女学校さらには高等教育機関である女子専門学校に進学した高齢女性を対象に、ライフヒストリーについての３時間から10時間におよぶ（時に複数回）デプス・インタビューをおこなった。インタビューではそれぞれの話題において、インタビュアーから意識的に当時の女子教育とマスメディア・大衆文化に関する情報を例示の形で提供し（インアタビュアーからの情報提供という「介入」）、インタビュイーの記憶を喚起する手法を用いた。インタビュアーとインタビュイーとの相互作用をおこないながら、ライフヒストリーの「語り」は構成されていった。

戦前に旧制の高等女学校や女子専門学校であったという歴史をもつ、新制高校および新制大学の同窓会組織にご協力いただき、インタビュー調査を受け入れていただける卒業生の方々へコンタクトをとった。複数の同窓会組織や有志に多大なご協力いただいた。

インタビュー協力者の一覧は表１のとおりである。表１において、生年月日や地域などは個人の特定がなされないような記載としている。また「語り」の引用においても、人名や学校名などの固有名詞は匿名化している。

表１　インタビュー協力者一覧

	生年	生育地	本人学歴	母の学歴	母の職業	父の学歴	父の職業	インタビュー実施年月日
Aさん	1920年代前半	大阪	高等女学校から女子専門学校家政理学科	不明	商家	不明	商家	2014年９月15日
Bさん	1920年前後	大阪	高等女学校から女子専門学校国文科	高等女学校	専業主婦	帝国大学	建築　官吏から大学教員	2014年12月11日
Cさん	1920年代初頭生まれ	阪神間	高等女学校から女子専門学校国文科	高等女学校	専業主婦	帝国大学	電気技師	2014年10月６日／2015年６月16日
Dさん	1920年代前半	大阪	高等女学校から女子専門学校家政理学科	高等女学校	専業主婦	不明	サラリーマン	2014年12月17日
Eさん	1920年代半ば	和歌山	高等女学校から女子専門学校家政理学科	不明	専業主婦	高等師範学校	中学校教員	2016年７月14日
Fさん	1920年代半ば	大阪	高等女学校から女子専門学校家政理学科	高等女学校	専業主婦	府立大阪医療専門学校	医師	2014年11月15日
Gさん	1920年代半ば	中部地方から大阪	高等女学校から女子専門学校物理化学科	女子高等師範学校	専業主婦	大学	商工省技官	2014年11月23日
Hさん	1920年代半ば	大阪	高等女学校から女子専門学校英文科	高等小学校	専業主婦	大学	ミッションスクール教員	2014年12月21日
Iさん	1920年代半ば	大阪	高等女学校から女子専門学校物理化学科	不明	茶道・華道を教える	師範学校	たばこ屋、幼い頃に亡くなる	2014年11月22日
Jさん	1920年代半ば	大阪	高等女学校	不明	専業主婦	不明	工場経営	2014年９月27日
Kさん	1920年代半ば	大阪	高等女学校から女子専門学校家政理学科	不明	専業主婦	専門学校	会社員	2015年１月16日
Lさん	1920年代半ば	大阪	高等女学校から女子専門学校英文科	不明	不明	不明	不明	2015年８月23日
Mさん	1920年代後半	大阪	高等女学校から女子専門学校物理化学科	小学校	専業主婦	小学校	サラリーマン	2015年６月29日
Ｏさん	1920年代後半	和歌山	高等女学校	不明	呉服屋	不明	呉服屋	2016年２月７日

調査概要は以下のとおりである。

調査場所：協力者の方のご自宅や公的施設など。

調査内容：ライフヒストリーについての半構造化インタビュー（進学をめぐる経緯・家庭環境・女学校や専門学校での学生生活・大衆文化やレジャー・友人関係・卒業後の就職や結婚など）。途中から非構造化インタビューに近い形で語っていただいた場合もある。

録音やデータ使用の合意：毎回インタビュイーの許諾を得てICレコーダーでの録音。インタビューの文字起こしについては、論文使用を前提にしたチェックをご本人にしていただいた後、インタビュー内容のトランスクリプト確定。

以下引用するインタビューの語り口についてはできるだけそのままの形を維持しているが、話し言葉のまま文字にしてしまうと理解しにくい点があるところは、意味が変化しない範囲で修正や補足の言葉を加えている。以下、「女専」は「女子専門学校」を、「高女」は「高等女学校」を意味する。

3. 調査結果　教育とマスメディア・大衆文化との関わりを中心に

3-1　家庭教育

まずは、家庭教育の状況について語られた概要を示す。

インタビュー協力者の方々のほとんどは高等女学校や専門学校に進学した女性たちなので、その家庭背景は比較的恵まれている場合が多い。ほとんどの人が、子どもの頃の経済的な苦労は経験していない。経営が安定した商家の場合（Aさん、Oさんなど）、もしくは、父親が大学学歴をもって教員やエンジニアなどをしている（Cさん、Eさん、Gさんなど）。商家や農家出身の父が、学歴を身につけて、医師・公務員など近

代的な専門職や勤め人になっていることも珍しくない。

父親は帝国大学や医学校に進学、母親は高等女学校に進学していることが多く、親の世代もそもそも経済的に恵まれ、教育熱心な家庭出身であったことがわかる。そうした背景から、協力者たちは、女子であっても「いまどきは」義務教育以上の教育が必要という考え方で進学を後押ししてもらった場合が多い。なかには、女子だからと進学を反対された例もあったが、多くの場合、進学を希望すればみとめてもらえていたようだ。高等女学校の中でも良い女学校に進学することをのぞまれるなど、一種のプレッシャーを感じていたとの語りもある。また高等女学校卒業後も何らかの形で高等教育を受けられるように、積極的に進学を励ます場合もあった（Fさん：「もう女学校だけではなあ」と父）。

インタビュー協力者たちは、子どもの頃から、お茶、お花、ピアノ、バイオリン、マンドリン、お琴、書道、三味線（と地唄）、長唄、仕舞・謡、日本舞踊、水彩画、日本画、南画、洋画など、さまざまな習い事をしている。特に、お茶、お華、お琴、ピアノはかなりポピュラーな習い事であったようだ。これらは戦後も続き、いまもなお女性の習い事としての位置を維持している。三味線や仕舞は、現代ではほとんどみられない習い事であるが、これらを挙げる人もかなり多かった。そうした習い事に力を入れている家庭では、母や父も書道・絵画・楽器などを嗜む（母がお琴や三味線、父が尺八という場合も）、あるいは近所の人たちに教える師範の立場にあった。

既製服が当たり前でなかった時代、裁縫は家事において重要な位置を占めており、当時の女性はとって欠かせない技能の一つであった。和裁のみならず、当時飛躍的に技能が発展していく洋裁については、家で母から習ったり学校で学ぶに止まらず､裁縫教室でより専門的な技能を身につけることもめずらしくなかった。

親だけでなく、きょうだいやいとこなど、親族関係全体が高学歴という傾向もみられる。のちに、インタビュー協力者が結婚を意識する際には、夫（あるいは夫の候補者）は、大学卒業、特に帝大卒の学歴をもつことがなかば当然視されている面もあった。学歴が重要な指標となって、婚姻が結ばれ、比較的豊かな社会階層（ミドルクラス）が形成・再生産されていたことがうかがえる。

3-2　女学校生活と良妻賢母主義教育

つぎに高等女学校と女子専門学校での女学生生活についての「語り」をみてみよう。

高等女学校といえば、戦前期における代表的な女子中等教育機関であり、中流以上の恵まれた家庭出身者でなければ通うことのできなかった学校である。その女学校生活の記憶は、彼女たちが学校生活を過ごした時期によって大きく異なる。

先行研究で示されていたように、昭和戦前期までの卒業生の学校生活は、勉強、クラブ活動、学校行事、クラスメイトとの親交で彩られ、インタビュー調査においてもこれらのことについて語られることが多い。もちろん一口に女学校といっても、都市と地方、公立と私立、学力レベル等によって様々なタイプの学校が存在していたため、彼女たちの思い出のありようは当然のことながら一様ではない。しかしそれでも「人生の中で一番楽しい時間だった」という思い出は多くの女学校卒業生たちに共有されていた。

一方、今回のインタビュー協力者たちの学校生活は主に戦時中である。ある程度の年齢幅があるため、女学校時代に戦争体験をした女性もいれば、女専に入学してから本格的な戦時体制に入った女性もいる。戦時体制に限らないこととして女学校生活の特徴として語られていたのは、男女の分離が徹底されていたことである。例えば、通学経路や電車の車両が男女で分けられていたことをCさん、Lさんが語っていた。戦時体制の特徴としては、DさんやOさんが語っているように、女学校で英語が敵性語とみなされ学校のカリキュラムから排除されたといったことが挙げられる。しかしなんといっても最も強烈な記憶として共通している

のは、学校生活が学徒動員による労働中心の生活になったことである。戦争協力が優先され学校の勉強が後回しとなっていったことや、とりわけ敗戦の年は完全に授業が停止となり、軍需工場を中心に泊り込みで労働に従事していたことが詳細に語られている。

興味深いのは、辛く厳しい戦時期であっても、そのなかでクラスメイトたちと楽しみを見出しながら過ごしていたエピソードが語られていることである。そしてCさん、Bさん、Dさん、Kさんのように、彼女たちなりの戦争に対する捉え方があったこともわかる。記憶は書き換えられるものであるし、戦後になってから加えられた解釈もあるだろう。そういったことを勘案したとしても、当時の女学生たちがどういった思いで戦時中を過ごしていたのかを今回聞き取ることができたのは大きな成果であった。

今回の調査対象者たちのもう一つの特徴は、女専の卒業生を中心としていることである。高等女学校に進学するだけでも高学歴とみなされた時代、女専にまで進学できたのは男子以上にごく一部の限られた女性たちだけだった。なぜなら男子と異なり女子の場合、教育年数の長さと学歴の高さは結婚に際してリスクとなり得るからである。今回の調査では彼女たちがどういった理由と経緯で女専に進学したのか、また、女専での学びがどのようなものだったのかも聞いている。女専への進学理由には、いわゆる「徴用逃れ」という側面が少なからずあったようである。また進学先の決定については本人の意志だけでなく親の意向の影響も大きかったようだ。現実的に進学費用等は親掛かりになる以上、親の理解がなければ進学できなかったからである。進学自体は許されても、どの分野に進学するかという点で親との間に意見の相違が見られた例もあった。本人の希望と家族の希望にズレがみられ、妥協点と着地点を探った様子なども聞き取ることができた。こういったところも注目すべき点であると思われる。

では、戦前の女子教育の柱であった良妻賢母主義についてどのように受け止めていたのだろうか。インタビュー協力者の方々は全員高等女学校を卒業し、多くの方がさらに女子専門学校に進学している。戦前としては高い学歴をもった女性たちだったといえよう。よく知られているように、高等女学校の教育の要は良妻賢母主義であり全員そうした教育を受けたという記憶はお持ちだった。良妻賢母というメッセージを真面目に受け止めていたと述懐する方もいらしたが、少数であり、以下にみるようにさまざまな受け止め方がみられた。また、高等女学校の教育方針も学校によって儒教的な婦人道徳を強調するところとそれほど堅苦しくないところがあったことが語りの中からわかる。

「良妻賢母と教わっていた、そのときは別に何とも思わず、「女ってこんなものだ」と思って。「従わないといけないんだな」とか。ええ、疑問持つことないです。「ああ、あれは良妻賢母を育てていた」と、今になって思います。疑問とかはそんなの全然。国もそういうことを言っていたでしょう。（戦時中だったので」銃後をきちっと守らないといけないと学びました。」（Mさん）

「良妻賢母については、それは、言われた。強制はなかったけれども。卒業式のときに同窓会の会長さんが読む中に…「良妻賢母」って。毎年同じことを言っておられた。」（Lさん）

「女学校時代は堅い学校でした。今の高校はだいぶん違いますけれども、わたしらのときは、もう堅い堅い学校でした。気持ちがカチカチの。修身なんかで良妻賢母と言われて、それで当たり前だと。その時代、当たり前だと思いましたね。反発の気持ちはなかったです。まあ、ちょっと進んでいる方はまた違う考えを持っていらしたかも分からないけれど、わたしら、何か流れに…こう、一緒に流れって行った感じですもの。そう言われたらそんなもんだろうなと。」（Oさん）

「女学校は、良妻賢母を強調してましたし、戦争中でしたから、軍国主義的な感じでした。女学校の先生方のおっしゃること、一応、信じてはいました。それに対して反発するだけの知識はありませんでした。やはり子どものときから戦争の中で育っていて、そういうような教育を受けていますから。」(Gさん)

「高等女学校では、散々。何せ良妻賢母ですもの。もうそれだけ。女は勉強なんかしなくてもいいというのが学校の考えだったから。そりゃあ、いろんな学校がありますよ。県一なんかはちゃんと勉強させるし、公立のしっかりした学校はきちっと教えたけれども、うちの学校は良妻賢母だったの。」(Cさん)

良妻賢母が強調されていたことはほぼすべての方が記憶していたが、学校教育における良妻賢母主義に深く感化されたといった言葉はあまりみられなかった。かなりドライに、あるいは反発をもって受け止めていた場合もあった。

「卒業したら結婚して良妻賢母になるのですよと教わりましたが、当たり前だと思って聞いていました。だけど、私は一生独身を通すつもりでした。そんなのね……赤ちゃんを産んで、おしめを持って追っ掛け回すなんて嫌ですわ。それよりも数学でもやっているほうが面白い。」(Aさん)

「女学校時代は、何かいったら良妻賢母ってあったね。それで何か、女大学か…。本があってね、乃木将軍が亡くなったときに夫人が後追い(筆者註 乃木大将が明治天皇に殉死した際に、静子夫人が共に殉死した事件)した。あれをものすごく褒めたりね。あんなのを読まされた。そのときの歴史の先生、男の先生だったけれど、その先生にそういう話ばかり聞いたでしょう。女専に入ってから駅でその先生に会ったの。わたし、あいさつできないのよ。嫌な先生だと思って(笑)。それは本に書いてあるの。夫に殉じてという、それがものすごく美談なのよ。あほらしいな、思いましたよ。」(Pさん)

「良妻賢母については教わるたび、シャーッと上通っていたわよ。うん、わたしは気に入らないことはみんな上を通るの(笑)。面白いなと思ったらチャッと引っ掛かるだけ。気に入らなかったら、みんな上をスースーと通っていく(笑)。大変便利な頭でしたのよ。」(Cさん)

「(良妻賢母については)、言いたければ言っとけという感じ(笑)。そんなの言われたとおりにできるはずないんだからね。」(Nさん)

高等女学校から女子専門学校に進学した場合には、高等女学校の教育を相対化してみつめる視点もうまれている。女子専門学校に進学した人たちは概ね専門学校の「自由な」雰囲気を歓迎している。

「女学校はわりと厳しい学校でしたから、女学校に比べたらすごく自由な雰囲気だなと思いました。高女は良妻賢母を強調していましたけれども、女専は良妻賢母的な教育をしようということは、全然なかったと思います。そこが、すごく違いました。女専に入って、本当に何かすごく自由な感じになって、すごくみんな伸び伸びしていました。」(Gさん)

「女専では良妻賢母みたいな話はあんまり出てこなかったわね。校長先生もそんなめいたこと、おっしゃ

らないわよ。逆に、女性でも自分の能力を発揮する、むしろそのほうじゃないかしらね。だから案外自由。自由…まあ、ともかくいい先生で。先生方が一生懸命教えてくださるから、わたしたちも一生懸命習ったって感じね。３年間。」（Cさん）

「良妻賢母というのは女学校では言われたの。でも女専では言われなかった。そう、もう良妻賢母…。『わたし、子ども産んだら将来、陸軍大臣にして…』とかそんなこと言っている人がいました（笑）。女学校よ、それ。女学校。そういう人いたものね。」（Pさん）

女専（大阪府女子専門学校）に進学していた人たちに共通にみられる語りは、高等女学校に比べると女専が古めかしい良妻賢母主義ではない、もっと自由でのびのびとした校風であったことについてである。ほとんどすべてといって良いほど、それはなつかしい良い記憶として卒業生の中に残っている。

3-3　マスメディアと大衆文化

子どもの頃に、家に本がたくさんあったと語る方は多い。「家庭教育」の項目で述べたように習い事もさかんであり、多くの方が「文学全集」などの文学書、楽器、日本画や陶器や「美術全集」など文化資本にめぐまれた家庭で育っている。彼女たちは、幼い頃から絵本や『小公子』などの児童書、『幼年倶楽部』『少年倶楽部』『小学一年生』などの子ども雑誌をいろいろと読んでいる。小学生の時に『小学生全集』をそろえてもらっていたもらっていた人もいる（Cさん）。

もう少し大きくなると、『少女倶楽部』や『令女界』などの少女雑誌（Eさん、Kさん、Lさんなど）を読いんでいる。彼女たちは少女雑誌の付録も楽しみにしていたようだが、理系に進学された方は男の子向けの『少年倶楽部』を買って貰い、科学系の付録を楽しみにしていたとの語りもあった（Iさん）。『のらくろ』や『冒険ダン吉』『正ちゃんの冒険』などの子ども向け漫画も楽しんでいたようだ。

昭和初期には、都市の中流家庭に子ども向けの絵本や児童書の必要性が浸透していたことが確認できる。そうした家庭環境もあって、読書が好きだったという方は多かった。

「うちはまあまあ余裕がありましたけど。雑誌もまあ、あったほう。『少女倶楽部』とか。『幼年倶楽部』から始まって、『少女倶楽部』かな。母がとっている『主婦の友』か何かの付録とか、そういうものを読んでましたね。童話の本とかね。児童向けのもの、子供用の童話とか童謡…。童謡とか流行歌が書いてある…こんなごっつい本で、歌謡曲からいろんなものが書いてあるものがあって、それを大事に大事にしていたのは覚えていますね。それは覚えていますね。それは、「大きな本、大きな本」って言って大事にしていた（笑）。」（Lさん）

「雑誌は『少女倶楽部』とか、もう何でも読んでいましたね。小さいころから本を読むのは好きでした。本はうちにも山のようにあるから。改造社の文学全集とか。円本ですよ。１冊１円。結構高い本ですけれども、もうそれを、日本のものも翻訳ものも、何でも読んでいましたね。」（Dさん）

女学生時代に愛読した本としては、まず『漱石全集』 を挙げる人が非常に多いことが印象的であった（Bさん、Cさん、Eさん、Fさん、Hさん、Kさん、Mさん）。ほかに、森鴎外、芥川龍之介、横光利一などの純文学者や、純文学と大衆文学をまたいで活躍したといえる、徳冨蘆花、佐藤紅緑、菊池寛、泉鏡花、武者小

路実篤などの名前も挙がってきた。

海外の文学を読んだという方も少なくない。英文科に進学し、シェークスピアで卒論を執筆した人もいる。父や兄の影響でトルストイ、アンドレジイド、モーパッサンやロマンロランなど翻訳文学を読んだという方も多い（Bさん、Oさんなど）。大衆的な人気を誇った『風と共に去りぬ』の翻訳や、戦後に公開された映画に夢中になったという経験の語りもあった（Gさんなど）。

「日本の作家だと他には、夏目漱石とか、横光利一とか。とにかく文学全集は、明治の初めからずっとあったから、全部読みましたね。50冊ほどありますよね。菊池寛も泉鏡花もみんな読みましたよね。武者小路実篤とかね。佐藤紅緑も面白かったですね。久米正雄とかも読んだことはあると思いますけれども、あまり内容は覚えていないですね。」（Dさん）

「学生時代に、夢中になった本は『風と共に去りぬ』です。翻訳が出て。あとは漱石とかです。兄が本を好きだったので、本はたくさんありました。漱石全集もありましたし、いろいろな本です。兄と一緒の部屋で勉強をしていましたので、兄の本を読むことができました。

森鴎外も多少は読んだかな。芥川龍之介とかも印象に残っています。谷崎潤一郎は学生時代ではなかったと思います。卒業してから谷崎潤一郎の訳の『源氏物語』を全部読みました。」（Gさん）

「とにかくやっぱり小説やね。いっぱい読んだのは。やっぱり『アンナ・カレーニナ』とか。そりゃあ、トルストイとか、あんなものを読みました。もちろん翻訳で。あまり大衆小説みたいなものは読まなかったみたいな気がします。（帝大　フランス文学）お兄ちゃんのおかげでわたしは勉強したなと思います。お兄ちゃんはフランス文学でしょう？そしたら、もうほとんど向こうの、モーパッサン『女の一生』とか、ロマン・ロランとか、そういうような小説をお兄ちゃんとともにわたしも読ませてもらったから。

雑誌とかはそんなのはほんとにあんまり覚えてないわ。『婦人倶楽部』とか読んだのかな…。『女の一生』が一番心に残っている。だから、女はやっぱり独立せないかんなっていう…。兄が買ったら、「読め」って言わないけれど、買ったらわたしも読むということやもん。」（Oさん）

「やはり徳冨蘆花とかはよく読みました。『不如帰』とか、ああいうのは一生懸命読みましたね。『不如帰』は、女学校２年生３年生くらいですかね。あのときアンドレ・ジードというのをわたし読んだな。『未完の告白』とかね。」（Dさん）

「小学校のころには、家で『主婦之友』を取っていました。毎月来るような形で。それから、『小学１年生』とか『小学２年生』とか、小学館から出ていた、あれを…。あれはずっと読んでいました。女学校に入ってからは、もうそんなものが無くなってきた。『少女倶楽部』も、読むのを学校ではあまりよく思わなかったみたいね。戦時中、あまりふさわしくないみたいな感じですかね。

母は料理が好きでそういうのを…。『主婦之友』で新しいレシピとかを見て。だから、いわゆる日本食というのはあまり食べない。洋食というのか、あまり煮物というのは…。お野菜なんかは、お大根を炊いたりしていましたけれども、お魚は天ぷらとか、フライとか。カレーライスとか、ああいうものを。割とハイカラなものを。マヨネーズをこしらえたりね。ホワイトソースをこしらえたりね。バター焼きしたり。お料理上手でした。

『キング』を取っていたんですよ。あれを見ていたら、父が怒って（笑）。大人の小説、それが面白かったんですよ。怒られてね。それからもう見ないんです。怖かったですからね。親って怖いものでしたから。「駄目」って言われたら、もう…。いわゆる恋愛小説だから、親から見たら、「そんなん読んだらいかん」という…。吉屋信子がはやりましたね。読んだら怒られるので読みませんでしたが、駄目、駄目。」（Kさん）

父親が読んでいた雑誌『キング』や、母親が定期購読していた『主婦之友』『婦人倶楽部』『婦人之友』などの婦人雑誌に連載されている恋愛を扱った大衆小説を、こっそり読んでいたという証言もある（Bさん、Cさん、Fさん、Mさんなど）。当時女性人気作家であった吉屋信子をはじめとして、菊池寛、久米正雄などの大衆的な通俗小説を読んだ記憶のある方もいらした（Bさん、Fさん、Jさんなど）。

「母は『婦人倶楽部』を定期的にとっていました。女学校とか女専時代は、婦人雑誌などは読んではいけないのです。大人のいろいろなことが書いてあるのがいけないらしいのです。恋愛はご法度なのです。読んだらしかられるので、隠してある『婦人倶楽部』を、母が留守のときにこっそり引き出して、いろいろ盗み読みをするのが楽しかった。大人じゃないと分からない部分もあるから、よく分からないと思いながらも面白くて読んでいた。小説なんかも好きで読んでいて、岩田専太郎の挿絵が大好きで、それを写し取るなどしていた。読んでいる最中に母が帰ったりすると、その上に少女雑誌とか児童文学とかを置いて隠していた。一度もばれたことはなかったわよ。毎度、盗み読みをして隠さないといけないから、忙しかったわよ（笑）。」（Cさん）

「『主婦之友』とか『婦人倶楽部』はうちにはなくて、母は羽仁もと子さんの『婦人之友』をとっていました。友の会に入っていましたから、いつも『婦人之友』がありましたから読んだりしました。」（Dさん）

「婦人雑誌で菊池寛、吉屋信子とかも読みました。『主婦之友』を母が取っていました。毎月『主婦之友』と羽仁もと子さんの『婦人之友』を取っていました。その中の小説はわりと読んでいました。女学校で婦人雑誌を読むなとか、そういうことは言われなかったと思います。家で読んでいました。菊池寛や吉屋信子以外にも、通俗小説作家のものは読んだかもしれない。『主婦之友』の小説はよく読んでいました。『婦人之友』より『主婦之友』のほうが小説は多く、わりと通俗的でした。」（Gさん）

「好きな作家で覚えているのは、吉屋信子です。吉屋信子の映画は観てません。でも、少女小説は、女学校時分に読んでいないな。吉屋信子の本だけがあったのと、講談社の、それこそ今テレビでやっている『乞食王子』とか、あんなのを…。そのころ、貸し本屋さんというのがあったんです。近所の親しい本屋さんが『幼年倶楽部』とかそういうものを持ってくるのと一緒に、頼んだら貸し本で来ていましたね。『乞食王子』なんかでも貸し本で読んだんです。わたし、最近、息子に吉屋信子の本を買ってもらったことがある。古いのをね。」（Lさん）

ここではきちんと取り上げることができなかったが、戦争が激しくなるまでは、阪神間には映画、スケート、海水浴、スキー、宝塚歌劇など、豊かなレジャー文化が花開いていたようだ。子どもの頃、親につれられて、百貨店に行った思い出が語られる場合もある。親に歌舞伎につれていってもらったという経験のある人もいた。もっとも手軽なレジャーであったらしい映画も、女学生だけでは観に行ってはいけないとされて

いたが、親とだけでなく、友達といっしょに行った経験も語られる。『天井桟敷の人々』『舞踏会の手帖』『会議は踊る』など、有名な洋画のタイトルも思い出されている。「銀ブラ」にちなんで、心斎橋をぶらぶら歩く「心ブラ」を友人と楽しんだということもあったようだ。ただ、宝塚や映画に行くのは「不良」とされていたと語る人もあり（Eさん、Jさんなど）、学生の余暇活動を監視する「教護連盟」についてエピソードは頻繁に語りの中に登場する。また戦況の深刻化が日常生活に影を落とし始める話もよく語られる。

「昭和16年くらいまでの間は、映画も女学生は観に行ってはいけない。女学生の間はいけないのです。女専になったら割引券が廊下の隅につるしてあるから、行ってもいいわけです。『天井桟敷の人々』『舞踏会の手帖』が印象に残っていますね。有名なものは大体、みんなでスクラムを組んで行くのです。面白いのが来たら毎週行っていたかしら。２本立てで４時間なのです。それで今頃みたいに入れ換えでない。大入りのときはみんな通路に並んで、どこか席が空いたらバーッと座りに行くけれども、立ちっぱなしも多い。日本の映画はあまり観なかったけれども、李香蘭は観ました。『蘇州の夜』とか。でも、外国のほうが面白かった。『舞踏会の手帖』とか『会議は踊る』とかいう、いわゆる名画はたいてい観ていました。みんな字幕です。でも戦争で映画も日本には来なくなった。

本で読んで夢中になっていた『風と共に去りぬ』の映画が公開されたのは戦後になってから。この映画は戦時中にできていたそうです。船に積まれたフィルムが、日本を素通りして上海に行ったそうです。わたしの友達が貿易関係に勤めていてその船で上映したそうで、観に行ったそうです。「面白かったよ」と言う、女専を出た後でした。戦後にやっと来て観ましたが、面白かったです。」（Cさん）

「学校時代、戦争でスケート場がなくなったのです。わたしたちが２年生ぐらいでスケート場が閉鎖になったのでしょうか。歌舞伎座の上と朝日会館にあったのです。朝日会館にあったときは、最初のフィギュアのオリンピック選手も滑ってました。」（Kさん）

「もう本が無くなったんですよ。そういう雑誌が、戦争中。『主婦之友』とか、あんなものも…。無くなりました。」（Mさん）

4. おわりに

インタビューにおいて印象的であったのは、女学校や専門学校時代や卒業後の話をうかがっていると、自然に戦争の話になっていく様子だった。ほとんどのみなさんの唇からあふれ出すように、戦争時の管理統制の息苦しさや、空襲を受けた時の生命がけの体験、戦後の苦労など、具体的な話が語られ始めることが多かった。

1945年６月以降の何度も繰り返される関西各地（神戸、大阪、和歌山）での空襲の経験については、ほぼ全員が触れている。Aさんのように、広島の原爆被害を身近に見聞きした語りもあった。

それらの話は実になまなましく臨場感をもって語られた。自分の家が燃えた人も少なくない。空襲を逃げ延びたものの、怪我をしたり、非常に危険な思いをしたことが語られる。その恐怖感、理不尽さ、苦しみについて、昨日のことのように思い出され、熱を持って話してくださる方が多かった。語られる戦争体験には、実に凄惨なものもある。もちろん、空襲や戦争で家族・親族を失ったことも語られる。

みなさんの語りは、年齢によって多少異なるが、戦争が激しくなる前、昭和18年頃からの太平洋戦争下で

の総動員体制徹底期、空襲がたびかさなる終戦末期、戦後すぐの混乱期と、戦争によって日常生活が大きく変わる様子を明確に示している。戦争は、人生設計を立てるべき青年期の生活を変え、意識と価値観などに重要な影響を与えている。

ただ、戦争の意味については、協力者によってそれぞれとらえ方が異なっている。戦時中のプロパガンダを懐疑的にみていた人もいれば、学校が教える「日本の戦争は正しい、日本は負けない」という考え方を信じていたと想起する人もいる。前者のように戦争に批判的な視点をもっていた場合、家庭内でひっそりと交わされる会話以外では、表立って表明することが危険だったという思い出が共通する点である。

インタビューは、少なくとも１時間半から２時間、場合によっては３時間から５時間近くに及ぶ長時間のスタイルとなった。お一人の方に複数回インタビューさせていただいた場合もある。みなさま、かつての日々を生き生きと語られ、聞き手である研究グループはその豊かな内容に圧倒される思いで、話を伺い記録をとらせていただいた。インタビューの度に、昔日の記憶と当時の喜怒哀楽だけでなく、インタビューに応えてくださっている方の、まさに「いま現在」の暮らし方や思いが伝わってきた。毎回、そのお人柄にも感銘をうける経験をしたことを書き添えておきたい。

ライフヒストリー・インタビューをおこなう中で、女学校生活や大衆文化の「何か」が内面化された経験と、「女性」として生きる上での価値観・経験・ライフイベント・人生における選択とは、密接に関連していることが、あらためて感じられた。女子教育、そしてメディアや大衆文化が女性の人生経験といかに関わるのか、本稿では膨大なデータの中から部分的な基礎整理にとどまったが、これらを基に、また、別の視点から貴重なインタビューデータを見直し、今後の分析につなげたい。

＊この調査に関して、貴重な時間を割いてインタビュー調査にご協力いただき、個人的な事柄についても快くお話してくださったみなさまに心よりお礼申し上げます。また調査に協力いただける方の紹介をお願いし、複数の同窓会組織や有志に多大なご協力いただいたことに対してもあらためて感謝します。

＊本研究は科学研究費助成事業基盤研究（Ｃ）・研究課題名「1930～1950代マスメディアと女性―内容分析とライフヒストリー調査の結合」（課題番号26360047、研究代表者　木村涼子）の助成を受けておこなったものである。共同研究者として土田陽子氏（帝塚山大学　教授）にもお世話になった。

参照文献

木村涼子『〈主婦〉の誕生－婦人雑誌と女性たちの近代』吉川弘文館、2010年

Girls' Education and Mass Media in the Early Showa Period – From Interviews with Graduates of Secondary education for girls (Koto-Jogakko) and Women's Colleges in the Kansai Region –

KIMURA Ryoko

How did women who were highly educated before the war, when the educational opportunities they received were limited, recognize the Japanese society and what kind of life did they have? In order to examine women's life histories during the turbulent times, from the 1930s to the fascist period to the defeat, interview surveys administered to older women who were educated and presumed to have been familiar with print media.

By conducting a multifaceted content analysis of popular women's magazines, the author comprehensively depicts the virtual worldview that women's magazines presented to readers, and the relationship between readers and the media. In this article, the author will focus on girls' education and the relationship between girls with mass media / popular culture such as commercial magazines, books, and movies, and organize "narratives" about the life histories we have heard.